

新しい 病害虫 Vol.12

本県は栽培される農作物の種類や作型が多様で、発生する病害虫の種類も大変多く、また、同時に野菜・花卉類、それらの種苗などの海外からの輸入や国内での移動が大幅に増加し、それに伴って新たな病害虫の侵入、発生が続いています。これらの新発生病害虫は既存の病害虫との見分け方が難しかったり、効果的な登録農薬がないなど防除に苦慮するケースが多く見られます。

このような、新たに発生した病害虫の防除対策に役立つよう、見分け方や防除法などについて紹介します。



クロテンコナカイガラムシ



トマトホモプシス茎枯病



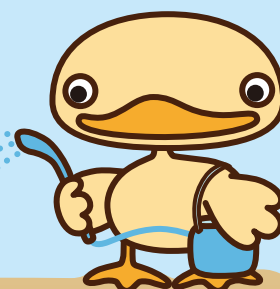
サクセスキクイムシ



ナシさび色胴枯病



ツマジロクサヨトウ



高知県病害虫防除所

クロテンコナカイガラムシ

Phenacoccus solenopsis Tinsley

平成29年度特殊報第2号

発生作物：ナス

形態、生態など

雌成虫は翅を欠き、体型は楕円形である。体長は通常3～4.2mm程度で、大きい個体は5mmを超える。背面に白色のロウ質物を分泌するため、全体としては白く見えるが、ロウ質物は垂中央部で薄くなるため、2対の黒斑があるように見える（写真1、2）。また、雄成虫は1対の翅を持つ。

成虫はワタ状のロウ質物の卵のう内に平均で350個程度産卵する。繁殖様式は、交尾後産卵する有性生殖と雌成虫が交尾せずに産卵する単為生殖の両方が知られている。本種の単為生殖個体群における1世代の発育期間は平均70日程度である。

被害

生長点付近を中心とした茎葉に寄生し、分泌した甘露からすす病を生じる。広食性で、海外ではワタ、オクラ、トマト、ナス等53科154種の植物に寄生することが確認されており、寄主植物は雑草から作物まで広範囲にわたる。

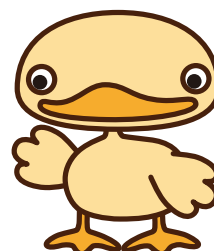
防除対策

発生ほ場では、被害を拡大させないために、寄生部位を早期に除去し、ほ場外に持ち出して土中に埋めるなど、適切に処分する。



写真1：雌成虫

写真2：ナス葉裏に寄生する雌成虫と幼虫



トマトホモプシス茎枯病

Phomopsis sp.

平成29年度特殊報第3号

発生作物：トマト

病徴

摘葉部位を中心に茎が褐変し、やがて株全体が萎凋、枯死する（写真3）。症状が進展すると、褐変部に小黑点状の分生子殻を形成し（写真4）、分生子殻中には楕円形の α 孢子及びかぎ針状の β 孢子が確認できる（写真5）。ただし、 β 孢子は見られない場合もある。本病の詳しい発生生態は不明であるが、接種試験では、茎の付傷部に接種約7日後から変色が認められた。また、菌の生育適温は25～27.5℃であった。

防除対策

- (1) 発病株は伝染源となるのでほ場外に持ち出し適切に処分する。
- (2) 多湿条件で傷がつくと感染しやすいので、摘葉などの管理作業はできるだけ晴天時に行う。



写真3：茎の褐変（左：摘葉部位からの褐変、右：進展した褐斑の様子）



写真4：茎の褐変部に形成された分生子殻

写真5：分生子（ α 孢子、 β 孢子）

サクセスキウムシ

Xyleborinus saxeseni (Ratzeburg)

平成30年度特殊報第1号

発生作物：なし

形態、生態など

雌成虫の体長は1.9～2.2mm、細長い円筒形で、光沢のある黒褐色をしている（写真6）。年1～2回発生し、成虫態で樹内越冬する。成虫は、翌年4～5月に脱出して樹勢の弱い衰弱した樹の枝幹に穿孔する。孔道の直径は約0.7mmで、そこから粉状の細かな木屑（フラス）を排出する。

本種の寄主範囲は広く、各種針葉樹、広葉樹に寄生する。果樹類では、なしの他に、りんご、もも、かき、くり、キウイフルーツの枝幹部への穿孔被害が確認されている。

被害

成虫がなし果実へ穿孔し被害果を生じる（写真7）。被害果は、日数の経過とともに穿孔部分を中心に腐敗、褐変する。断面を観察すると穿孔部分以外に空間が見られないのが特徴である。また、果実被害は、袋掛け後にも発生し、特に過熟果で多い傾向にある。

防除対策

- (1) 果実は、過熟にならないよう適期に収穫する。
- (2) 樹勢の衰えた樹は加害を受けやすいので、適正な肥培管理により樹勢の維持、回復に努める。また、穿孔が多く、衰弱の激しい樹は主幹部が残らないように伐採し、剪定した枝幹等も含めて適切に処分する。
- (3) 被害果を確認した場合は、周辺に枝幹の穿孔被害も発生している可能性が高いので、木屑（フラス）を目印に観察する。枝幹被害を確認した場合は、トラサイドA乳剤（200倍、4～7月、但し収穫21日前まで、5回以内）を樹幹部へ十分量散布する。なお、薬液が葉に付着すると薬害を生じるおそれがあるので注意する。



写真6：成虫

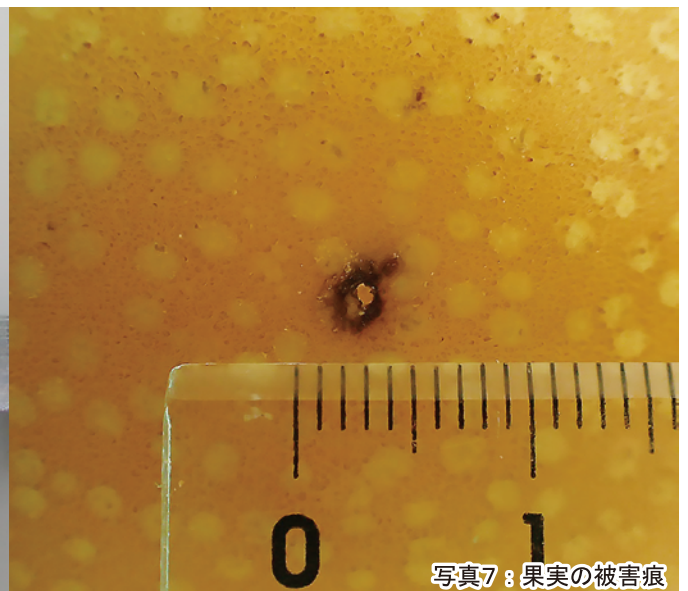


写真7：果実の被害痕



ナシさび色胴枯病

Erwinia chrysanthemi

平成30年度特殊報第2号

発生作物：なし

病徴

- (1) 罹病部の樹皮が灰黒色の水浸状となった後、そこからにじみ出た樹液様物が固まりさび色に変色する（写真8）。また、1樹に複数箇所での発病が見られる場合もある（写真9）。
- (2) 罹病部の樹皮下は褐変腐敗し、アルコール臭を発する。

防除対策

本病は、病原菌が風雨等により樹皮の傷口などに付着することで感染と考えられている。発病樹は2次感染の伝染源になる可能性が高いため、伐採、焼却等の処分を実施するとともに、伐採に用いた器具を消毒する。



写真8

写真9

ツマジロクサヨトウ

Spodoptera frugiperda (J. E. Smith)

令和元年度特殊報第1号

発生作物：トウモロコシ（スイートコーン）

形態、生態など

成虫は開張約37mm、雌雄で外観が異なり雄のみ前翅中央部に黄色い斜めの斑紋がある（写真10）。卵は寄主植物に塊状に産み付けられ雌の体毛で覆われる。終齢幼虫の体長は約40mm、頭部中央の逆Y字が淡色で（写真11）、尾部の刺毛基盤（黒色斑点）が隆起している（写真12）のが特徴である。

本種は南北アメリカ大陸の熱帯～亜熱帯原産であり、熱帯では年4～6世代発生する。南北アメリカでは夏季に成虫が移動・分散するが、暖地を除く地域では越冬できないとされている。

被害

幼虫が茎、葉、花、果実を食害する。若齢幼虫は葉を裏側から集団で加害し、成長すると加害しながら分散する。摂食量が多く、食害部には多量の糞が散在する。

防除対策

- (1) 多発すると被害が拡大する恐れがあるため、早期発見に努めるとともに、発生を確認したほ場では農薬による防除を行う。
- (2) 幼虫の分散を防ぐため、収穫後は直ちに耕耘する。



写真10：ツマジロクサヨトウ成虫（左：雄 右：雌）



写真11：ツマジロクサヨトウ幼虫（頭部）

写真12：ツマジロクサヨトウ幼虫（尾部）

高知県病害虫防除所では、農作物の病害虫や防除対策、また農薬に関する最新情報を提供しています。

高知県病害虫防除所

〒783-0023 高知県南国市廿枝 1100
TEL:088-863-1132 FAX:088-863-7470

TEL:088-863-1132 / FAX:088-863-7470 / E-mail:160506@ken.pref.kochi.lg.jp
URL : <http://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/?sid=2016>